

白猫 —常夏！熱帯夜に
震える魂—

RASN

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2015年8月10日に書いたものです、夏コヨミちゃんが来たから書いた感じですね。

目次

- 1 白猫
— 常夏！熱帯夜に震える魂 —

白猫 — 常夏！熱帯夜に震える魂 —

「はあー、楽しかったわねー。」

「はい、音だけでも充分に楽しめましたよ。」

「うん！みんなと花火を咲かせて楽しかったよ！」

天使の祭壇に続いている道からは飛行島の冒険家達が浴衣姿で下りてきた。

「そんじや、さつさと帰るか暑くてかなわねえぜ。」

「そうだな浴衣も中々良かったしなこのままでも良くね？」

「そうさね涼しいし…それにサワワやクローとかはそっちの方が動きやすくない？」

「…浴衣も中々良いのですが…流星にスースーとしてて…風を起こすときには少し…」

「おいらもスースーしてて舞台には上がりにくいな…」

「私もね、というよりあの服は一族の正装だし…取りに行かないと…」

冒険家達はサマーソウルに教えられていた小屋へとたどり着きその戸を開いた。

「そんじや男子は着替えを持ったら外で着替えてよねー？」

「覗いたりしたら承知しないわよ!」

「分かつてる、分かつてる。」

「にしても暗いな…窓ひとつも無いのかよ…」

「…そんじやア俺様の剣で…」

「エドガルドの旦那…それ前にやりかけた事でしかも今俺達は武器すら無いんだぜ?」

「そうですね…でも何も無くないですか?」

実際彼達のいる小屋には何も無くて、澁々と外に出た。

「ここじゃないのかしら?」

「ううん、この辺りにはこれぐらいしか小屋がないからここだと思うけども…」

「どうしよう、この格好でみんなの前に帰るのは…」

「シシヨー!小屋の中を模索したらこんなものを見つけたでござる!」

最後に出てきたフランの手には小さくたたまれていた紙があった。

「何?開けてみたら?」

「開けてみるでござる…」

フランの元に冒険家達が集まり、フランは紙を開いた。そこには小さな紙の中に豪快で細やかに書かれた筆文字が並んでいた。

「えーつと…『服は私がモアイ像前に置いといた！取り返したいならごつごつ山のモアイ像まで肝試しついでに取りに来い！ by 君達の熱く燃える夏 サマーソウルよ』…ですつて…?」

フランの頭に乗つて紙の中の文章をキャトラは読み上げたが、キャトラは呆れ顔になつていた。

「…どうすんの？みんな？」

「行きたいけど…また彼処に行くのは…」

「そうよね…私も勘弁するわ。」

「面白そー！行こ行こ！」

「私も行くー！」

「なっ!!エっ…エシリアが行くんなら私も…!!」

「面白そうですね、私も行きましょう。リユート君も行きますよね?」

「なっ…何で!？」

「わっ…私は無関係の為帰らせて頂く…!」

「待てよ!ウマルス!俺が行くならお前も来いよ!」

「なっ…!?!私は無関係と言つたし…この身一つでも帰れるぞ!?!」

「諦めろウマルス、状況的に逃げられねえぞ?」

「ぐぬぬぬ…」

「まあ俺もついていってやるから勘弁しろ。」

「カスミ!面白そうですから行きましよう?!」

「う…?そうね…あの服は大切なものだしね…」

「コリンねーね、RASNにも行くの?」

「あたしは…まあ面白そうだから行こうかねえ?RASNも行くつしよ?」

「…!(コクツ!)」

「うーん…にーにとねーねが行くならコヨミも行く!」

「キャンキャン!」

「私は…少しお祭りと海で疲れて…」

「リアム…勿論…」

「ああ…射的の決着はこいつで決めてやる!」

「セツシヤは行くでござるよ!」

「ふむ…面白そうな遊戯だ…妾も行くぞ!」

「私は遠慮しておきますわ。」

「行ってみましょう!」

「…肝試し…風神修行の一環と思えば…そう思えば…!」

「おっ…おいらは…えっ…遠慮しとくぜ…」

「ケツ！下らねエ…パスだな。」

こうしてごつごつ山に行くことになったのはRASN・ハーティ・タビイ・コジロー・ウマルス・リユート・コヨミ・コリン・カスミ・フローリア・サワワ・フラン・カモメ・キャロ・リアム・ザック・エシリア・インヘルミナの18人となった。

「あれ？まだ続きがあるみたい…？」

「何々…？『P・S あと行く人が決まったら二手に別れて進んでほしい、裏手の箱のくじで二手に別れるはずだからしてから行って下さい。』…何か丁寧な文面ね…」

「相変わらず粗い筆文字だね。おいRASN取りに行つて…」

「シシヨー！取つてきたでござる！」

「早っ!？」

キャトラがRASNの方へと首を向けながら取りに行かせようと言いつちかけた時、フランはフツと姿を消すとまた小屋の方から走つてきたのであった。

「相変わらずの早業ですね。」

「えへへ…誉めると恥ずかしいでござる…」

「はいはい、さっさと組分けしましよーね？」

「…!」

RASNは箱を持つと肝試しに行くメンバーの前に立つてくじを引かせた。

そして結果としてRASN・コヨミ・コリン・カスミ・フローリア・サワワ・フラン・カモメ・キャロの組と

リアム・ザック・ハーティ・タビイ・コジロー・ウマルス・リユート・エシリア・インヘルミナの組に分かれた。

「…何か…意図的に組まれたような気がするわ…」

「いいじゃないですか? 私はカスミと組めて嬉しく思いますが?」

「…何か企んでる?」

「いいえ何も?」

「やったー! にーにとねーねと一緒だー!」

「おやおや…そう喜ぶと私も嬉しいねえ…ね? RASN?」

「…(コクツ)」

「全力で頑張りましょう!」

「はっ…! はいっ…! 風神見習いですが頑張ります!」

「シシヨと一緒でござる! セシボンでござる!」

「ふっ…エシリア…直接決着はつかなさそうだけど…先についた方が…!」

「わあい! ユリウマバエと一緒だー!」

「のわ!? 私の名前に掠りもしていない気がするのだが…」

「気にしない気にしないー! 進めー!」

「私は人を乗せて歩くのは…ひっ…ヒヒーン!?」

「…無視された…!」

「リアムう…これで逃げれないよな?」

「ケツ!それを言うならザック!お前のビビり姿が見れるんだから嬉しいねえ!」

「んだと!」

「おやおや…向こうではRASNは楽園か…羨ましいねー」

「リユート君怖かったらお姉さんに抱きついてもいいのよ?」

「ふんっ…こんなの…平気だよ…」

「ふむ…妾の配下としては心もとないが…遊戯なのだからこれで良いだろう…」

「よーし!やったったんぞー!」

そしてアイリス・キャトラ・エドガルド・クロー・ディーネ・ソフィを残してごっこつ山へ続く森へと入って行った。

—ピレント島 森—

肝試しへと向かっている冒険家達の前には二手に分かれる看板があった。

「んー? 何々…? 右は恐怖の館…左は戦慄の川岸…ここが分岐点か…」

「どっちにするか…」

「ど…どちらも怖そうですね…?」

皆は迷い検討した上でリアムらは右へ、RASN達は左へと進んだ。

—左ルート 戦慄の川岸—

「にーに…怖いよお…」

「RASNさん…灯りは大丈夫ですか?」

「…!」

RASN達一行は灯りのルーン入りの提灯を持っているRASNを先頭にし、すぐ下は川が流れている崖を歩いてきた。なお提灯には荒々しく『夏魂!』と書かれている。

「うう…ねえ…何か後ろから変な気配したんだけど…」

「きつ…気のせいでござるよ…!きつと…そうでござるつて!」

「そつ…そうですよ!水辺は色々出るつて聞きますけど…」

「あわわ!?!カモメ殿!そんなプレザントリーな事は止してでござるう!」

「わつ…私だつて怖いんですよ!?!」

「ふひひ…こんなに暗いと悪戯しがいがありそうだねえ…?」

「コリン…コヨミちゃんが怖がつてるのに余計な事はしない。」

「ふふ…そういうカスミだつて手が震えてますがね?」

「なつ…何を言つてるの!?!わつ…私は今まで色んなまがごとを祓つてきたんだから…」

「こつ…怖くなんか…!」

「?ボチャン!」

「わわつ!」

「きやあ!」

「ふえ!」

「キヤーツ!」

「…!」

突然下の川に何か落ちた音がすると一行は声を上げて驚いた、そしてそのなかでカ

スミが一番大声でしかも灯りを持ってたRASNに真っ先に寄り添った。

「なっ…何なの…!?!」

「多分…岩か何か川に落ちたのでは…?」

「いつもゴロゴロと転がってくる丸岩は音もなく何処かに行くからね…」

「ムツ…カスミ殿? 何故にシシヨーに絡み付いているのでござるか…?」

「……………えっ…?……………ああ…づっ…ごめん…!」

カスミはオドオドとしながらRASNから離れた。

「あらあら…RASNさん…随分カスミから頼られてますね?」

「…! (ニコツ)」

「ふっ…フローリア…! 茶化さないですよ…って、何であんたは笑ってんのよ!?!」

「でもお祭りの時よりは少し控えめですね…?」

「フローリアねーね? 控えめって何が?」

「あらあら…それはね…」

にわかには狼狽しているカスミをよそにコヨミは疑いも知らないような眼でフローリアに質問していて、フローリアはそれに笑顔で答えようとしていた。

「わっ—! わっ—! わっ…私フローリアと一緒に少し先に行くから!」

「あらららっ—」

「そうだけど…こんなところにこんな館なかったよ…」

「族長さんから貰った地図を参照しても該当できる家屋はないみたいですね…」

「つてことは…あのサマーソウルつてのが建てたのか…」

「うむむ…この禍々しい感覚…かつて私が…」

「あーユウリマバエちゃんまた嘘言ってるー!」

「俗説だ…それより私はウマルスだ!ユリウマバエとかユウリマバエとかではない!」

「ふむ…要はこの館を制圧すればよいのだろうか?なら火を放ちその混乱に乗じて…」

「女王さん…俺達はここを通り抜けるだけなんだけどな…」

「ともかく早いとこ入ろうぜ!」

やけやたらに張り切るリアムを先頭に館の扉を開き中へと入った。

「にしても暗いな…何も見えねえ…」

室内は月の光が入らなく、完璧なまでに闇が広がっていた。

「んー?あつちも面白そー!」

「おおつと!?!こんなかでマジではぐれたら洒落になんねえぞ?!」

「はーい…!」

「灯りとかどうにかなんねえのか?」

「ランタンとか松明とか持ってこなかったからな…」

「ふむ…準備が悪いな…」

「なに威張ってんだ？ ウマルス、そんな暇あったら何とかできる策を考えろよ。」

皆が暗闇の中悩んでいるとペカッーと辺りが明るくなり始めた。

「なっ…!!?何だ!!?」

「眩し…くはないけど誰だ?」

「はい、私ですが?」

みんなが声の方を見るとそこにはハーティがおり、光っていたのであった。

「光って…やがる…!!?」

「わっー!すごいすごいー!隠し芸だー!」

「いいえ、あまりにも暗いので私の機能の一つでもある自動発光システムが作用したので。」

「でも何かポワポワと光っていて何か怪しくないか?」

「では集中照明でよろしいでしょうか? こうビーつと。」

ハーティは耳元の何かを少し捻ると、体から発していた光が消えて代わりに眼からビームのように光が飛び出したのであった。

「わあ!ビームだビーム!」

「取りあえず辺りを照らしておきますね。」

ハーティは眼からビームのような光を放ちつつ辺りを照らした、そうすると彼等のいるところは大広間で部屋の隅々に甲冑や鎧が飾られていた。

「何だ、鎧ついてもどれもボロボロじゃねえか…」

「おっ!ここら辺は売れそうかな…?」

「私用のは…無いのか。」

「何ぞ、どの甲冑も本国の物に比べれば貧相なものばかり…ん?」

飾られていた甲冑を見て回っていたインヘルミナはある甲冑の前で急に止まり、その他の冒険家達もその甲冑の前へと集まった。

ちなみにその甲冑は着たら息もできなそうなほどどつしりとした甲冑であった。

「どうしたんだい女王様?この甲冑がお気に召されましたか?」

「否…皆のもの少し静かにできるか…?」

インヘルミナがそう囁くと皆は口を閉ざした、そうすると室内には静かな風の音だけとなった。

「……。」

「……………」

「…へつきちつ!」

「…へきちっ!」

途中ウズウズとしていたタビイやエシリアが足をパタパタとして埃をたてて、その埃でくしゃみをしてしまった。そしてそのくしゃみは彼らが見ていた甲冑に当たった。

「ひえ……?!」

そしてその甲冑はブルリと震えたのだ。

「……。」

「…どうすんよ…?」

「…とりあえずここから離れよ…」

「わああい!動いたー!」

「それっ!スポツと!」

「何やんってんだお前らー!」

エシリアとタビイはキャツキャと目の前の怪しい甲冑にベタベタと触れて、タビイは甲冑の兜を脱がした。すると鎧の中から青い髪と眼で謎の触角のようなものと、耳から後頭部をカバーするような物を付けた肌色が薄めな女性の顔が現れた。

「人…!」

「何でこん中にいるんだよ!」

「ひっ…!?ごっ…ごめんなさい…!?でっ…でも皆さん…!」
「ん…?」

すると青色の女性は何処からともなく槍のようで針のような物を取り出して上に掲げた。

「みっ…見ないでくださいー!!」

「えっ…?ってうわっ!」

すると掲げているものから雷が発射され室内なのに落雷が起きた。

「何しやがる!?!のわっ!」

「わあい! 楽しー!」

「200回ぐらい避けたったんぞー!」

「妾の盾となれ!」

「何しやが…ほべー!」

「さて! 私は雷は…あがつー!」

だがリアムやザックらは必死に回避したり、面白そうに避けて数を数えているエシリアやタビイやウマルスとコジローを盾にして凌いでいるインヘルミナ等冒険家達は各々対応していた。

—左ルート 戦慄の川岸—

「あつ！カスミねーね！フローリアねーね！探したんだよ！」

「どうしたでござるか…そんなにパニックって？」

カスミとフローリア以外の左ルートの冒険家達は無事にカスミ達と合流できたが、二人は何故か息を荒げてやって来たのであった。

「たつ…大変なの…！真っ直ぐ進んだ先の湖みたいな所で人が…!？」

「ハア…ハア…！…はい！人が溺れていました…！RASNさん!？」

「…!？」

RASNはカスミとフローリアの間を駆けて抜けていった。

「わわっ!?!まつ…待つてよにー!？」

「キャン！キャン！」

「わわっ!?!ああ!?!二人とも待つててば!?!」

「ヨミやタローやその他の女性陣もRASNの持つ提灯の灯りを頼りに走って行き、

湖へとたどり着いた。

「RASNNさん?!」

たどり着いたらRASNNは既にびしょ濡れであり、傍らにはやたらヒラヒラが付いた薄着で若干な茶髪めいた髪を結んでいる女性がぬべーっと横たわっていた。

「だっ…大丈夫なの!?!」

「…!」

「えつと…こういうときは…巻物…巻物…!あつ!服と一緒に置いてました…!」

「サワワ殿、巻物はこれでござるか?」

困惑しているサワワの側のフランは何処からともなくサワワの所持品である風神の巻物を手渡ししてきた。

「えつ?…はい!でもなんでフランさんが…!?!」

「いやー今しがた困っていた姿を見てすつとんで取りに行つたでござるよー」

「…そんならついでにみんなの着替え取って来てくれれば万事解決じゃ…?」

「…い…いやー結構あそこは往復で足早く走っているのは…」

「…んーだつたら仕方ないですね…」

フランが額に汗を垂らして皆に説明してる中サワワは巻物を開いていた。

「あつ…!ありました!えつと…人が溺れてしまったときは…心肺蘇生を行うべきと書いてあります!方法は…」

「……」

するとRASNはサワワの言う人工呼吸の方法よりも早く溺れていた女性を仰向けにして顎を上げて気道を確保していた。

「なんか…手慣れてる？」

「RASN船長は海育ちみたいですから…」

「すごい…私が読み上げる速度よりも速い…!？」

そしてRASNは女性の胸を数十回押しつけて口元に耳をすまして、表情をキツ！と固めるとRASNは女性の口元に顔と言うより口を近づけ人工呼吸しようとしていた。

「だめっー!？」

「オーララっ!？」

「駄目ですっー!？」

だがカスミ及びにフランとカモメがRASNを湖に突き飛ばした。

「わわっ!?!につ…に…に!?!」

「なっ…!何なの唐突に!?!RASNは人助けしてる最中じゃない!?!」

コヨミとサワワは突き飛ばされたRASNを心配し、驚いたキャロは突き飛ばした三人を睨み付けた。

「い…いや…わっ…私は…!?!」

「せつ…セツシヤはリフレーチイ的に体が…!?!」

「私も…反射的に…!?!」

三人は何故か顔を赤らめて立ちつくしていた。

「おやおや…?カスミ…鼓動が速いですよ?」

「そつ…それは…!?!」

カスミはフロリーアによって更に顔が赤くなった。

「そつ…そんなことより早く人命救助よ!人命救助!」

「あつ!はいっ!…巻物には…『もし口対口の人工呼吸がためられる場合は、更に胸骨の圧迫をすること』と書いてあります!」

「そうと決まれば…!カモメ殿!ダコールしてくれでござる!」

「分かりました!」

RASNはコリンとココミによって陸へとあげられた。そしてカモメが自慢の怪力を駆使した心臓マッサージを行い息を吹き返した。

「プハア!?!…あれ?ウチなんで倒れてんの?」

「よかった…!何とか息を吹き返しました…!」

「ほんとホツとしたわ…!」

目をさました女性は身体中をグリグリとまさぐるように動かしながら立ち上がった。

「んーつと…？まずはウチはレンファ、そんであなたたちは？何でウチを囲っているの？」

そしてRASN達はそれぞれ自己紹介をしてどうしてこうなったのかを話していた。

「なるほど…と言うことは舞の練習で疲れていて足を滑らせザバーンってことね…」

「ところでレンファねーね？舞ってどんななの？見せて！見せて！」

「キャウン！キャンキャン！」

そしてコヨミとタローはレンファの服を少し引つ張りながらレンファにお願いしていた。

「わわっ!?あんまり引つ張ると脱げちゃうわよ!?!」

「にしても派手…というか破廉恥な格好ね…」

「お？貴女も着てみる…?」

「…ッ?!結構よ!」

カスミもレンファに質問したが、返して顔を赤くされたのであった。

「んー…でも私の舞いは」

そう言うレンファは服に引つ付くコヨミとタローを引き離し、湖を提灯の灯りを背

に舞い始めた。

「は〜!よいこらさっさ〜よいさっさ〜♪明日は明日の鐘が鳴る〜♪」

「わあ…綺麗な舞ね…」

「こうなると私も踊りたくなるねえ?」

「ふふ…その綺麗さは音だけでも綺麗に想像できますね…」

それを座り見ている冒険家達は賛美の声を上げていたが、レンファが踊り始めて約五秒後…突然レンファはフラリとよろけ始めた。

「え…!?!」

「…!」

そしてRASNがバツと立ち上がると倒れるレンファの背後に回り込んで受けとめた。

「だっ…大丈夫ですか!?!」

「あー…大丈夫、大丈夫。いつもこの浄蓮の舞をやるとうこうなるから…」

「いや…でもさ…短くないかい?五秒位しか踊ってないように見えるけど…」

「いやーあれやれるのは五秒が限界だから…」

「むー…何とソリターな…」

「いや…あの舞いは何か特別なものを感じたわ…」

「おやおや…お客さんはお目が高いねー。この浄蓮の舞は邪気を清める儀式でね…これやると暫く動けなくなっちゃうから…」

レンファは目の前にいるRASNを見るとぐるりと体を上手く使いRASNの背後に回り込んだ。

「だから暫くは無防備だから…こうさせてもらおうねー」

そう言うレンファはRASNにおぶってもらわれるように背中にのっかった。

「…!?」

「はあ…貴方の背中落ち着くわ…暫く…ふああ…」

そしてレンファはRASNの背中ですやすやと寝始めた。

「…寝ちやった…」

「むう…いいなーコヨミもーにの背中に乗りたい…」

「…うらやま…」

「おやおや?カスミも羨ましいと?」

「なっ…!?何言ってるの!?!」

そうしてRASNの背中にレンファが乗せられたままモアイ像へと一行は進んで行った。

—右ルート 恐怖の館—

「けほけほ……! あーまだビリビリする……」

「すみません! すみません!」

「……気にすんなよユイ、俺やリアムのこの程度……」

「きゃっ?!? 見ないでください!?!」

先程雷を落とした青髪の女性と共にリアム達は前に進んでいた、だが青髪の女性はかなり際どい格好でリアム達は半数は黒こげになって、アフロヘアーな感じの人もいた。

「にしても……確か高性能アンドロイドなんだろう? 出口は分からないのか?」

「ヒヤッ!? そんな頭で聞かないで……! 恥ずかしいです……!?!」

「……ねー、このやり取り飽きたー!」

「ごめんなさい……! でも……恥ずかしいんです!?!」

青髪の女性はユイというアンドロイドであり、高性能であるものの恥の感情が増幅させられてしまう難点を持っているのである。

「…ユイはあれだし…ハーティは前しか照らせないしな…」

「むう…リユートちゃん、そう言うのはめつだぞ？」

「何か感情がこもってないんだよな…」

「何か？」

「何でもねーよ…」

そうしてる間に彼らはある部屋へとたどり着き、バラバラに分かれて部屋の中の搜索を始めた。

「…部屋…また変なのはいないよな…」

「でもそれはそれで面白いけどね！」

「でもよ、変なのがあっても勝手には…」

「わあ…スイッチだ！えーい！」

リアムの注意が行き届く前にエシリアは壁にこれ見よがしに付いているスイッチを押してしまっていた。

「つて?!言いきる前に押しやがった!?!」

すると部屋が震えはじめて、入ってきた扉が閉ざされたのであった。

「なにしてんの!?!」

「出入口が塞がれて脱出できないか…」

「ちきしょう!これじゃ不味い…いやこれじゃ帰れもできねえじゃねか!」

「おや…?ウマルスが見当たりませんか…?」

突然の出来事にその場にはいないウマルス以外は驚いていたが、その最中部屋内の壁がぐぐつと回りはじめてそこには何かがいた。

「ハーテイよどこか脆いところはないか?」

「…すみません光を出してる間はそう言うのは使えなくて…ユイはできませんか?」

「ひえっ!?!私が…!い…嫌です!恥ずかしいです!」

「…駄目だこりや…正に八方塞がりかよ…」

「だが諦めるには早いのでアール。」

「そうだな…つてザツク…こんな時に変なキャラ付けすんなよ…」

「ん?俺が何か言ったか?」

「え…それじゃ…さっきの声は…」

「それは私の声なのでアール!」

「…でっ?!出たー!?!」

リアムとザツクの視線の先にはツギハギまみれのウサギのようなぬいぐるみが頭を抱えていた。

「ん!魔物であるか!?!ならこのぬいぐるみ騎士の出番でアール!」

「喋る…ぬいぐるみ…!?」

「ノン!ぬいぐるみ騎士でアール!!…つとおや?ユイ殿であるな?」

「あつ…!リスリーさん!?何でこんなところに!?!」

「おや?ユイ殿もサマーソウル殿に頼まれ…のわっ!?!」

リスリーと呼ばれるぬいぐるみは後ろから接近していたエシリアとタビイが押し倒してしまっていた。

「わああ!喋るぬいぐるみだあ!面白いー!」

「わああ!?とつてもふかふかだぞー!?!」

「何するでアールか!?!痛たた!?!目は止めてほしいのでアール!?!」

そして二人は倒れたリスリーの体をまさぐり色々な部位を触れていった。

「…流石は純粋少女…いや…天然か?」

「そのようなことを議論するときではないぞコジローよ、この物は最初からあつたか?」

「ん?そーいやこんな人形は無かつたよな…」

「人形ではない!ぬいぐるみ騎士で…!のわー!?!」

「探せばなんとかなるってか!やってやるぜっ!」

そうしてリスリーで遊ぶタビイとエシリアとこそそと見るユイ以外は部屋のなか

をくまなく探して隠し通路を見つけたのであった。

「これで館ともおさらばか…」

「怖いっていうか…バタバタしてたけどな…」

「お土産♪お土産♪」

「我輩はプライズではないのでアール!?!」

そして一行は館を背にして先に進んで行った。

—ごっごっごつ山 モアイ像—

「ようやく全員集合か…」

「うう…人がいっぱい…恥ずかしいよお…」

「のわっ!?!こっ…!仔犬が我輩の耳を—!?!」

「ん—?何か流れで付いていったけど…賑やかだね—?」

ごっごっごつ山のモアイ像前には少しボロボロなりアム組の冒険家達と汗まみれのRA
SN組の冒険家達があった。

「にしてもRASN…汗ベタじゃねえかよ…何かあったのか？」

「………っ……！」

「………えっ…あのレンファって人を助けた後は突然巨大山蟹が出たけど、ココミの雪ダルマを当てたらビクンビクンと痙攣しながらやられモーシオンを繰り返していた…？」

「………（コクコク！）」

「…へー…でもよ…俺達の方は途中色々なドラゴンが森の中にいて訳もわからずとりあえずボロぬいぐるみと馬を盾にドラゴンを撒いたが…マッドネスジャガーに羽生やした獣に遭遇して地獄を見たぜ…」

そしてRASNとリアムがモアイ像の側で話し合って（？）いる最中、そのモアイ像の頭にはあの男が…！

「お前らー!!遅いじゃないかーっ!!」

あの男とはサマーソウルであった、いつも通りのブルーメランパンツと虹色サングラスと小麦色の肌を持って暑いポージングでこちらに叫び呼んでいた。

「なっ…なんなのあれ…!?奇抜すぎよ…！」

「わっ……ああ…！」

冒険家達がモアイ像の頭に顔を見上げてる中レンファは初めて見るサマーソウルに

驚いていて、ユイは目を丸めて口をあわつかせていた。

「はっ…恥ずかしい…いやっ…!?破廉恥…!!」

「ごはあっ!?」

ユイは槍を取り出すとサマーソウル目掛けてビームを発射し、サマーソウルは直撃を受けて地面へとへばりついた。

「……?!」

「…フツ…少年よ…!心配無用だ…!即死回避だっ!」

「ひええ…!?蘇るなんて…恥ずかしい…!」

サマーソウルに駆け寄ったRASNであるが、サマーソウルはマッチョポーズと共に立ち上がってモアイ像を登った。

「さて!諸君ら!よくぞ私の肝試しを突発できた!おめでどう!おめでどう!うおおお!」

「泣いて喜ぶのは結構だけど…早いとこ私達の服とかを返して!」

「うむ…だが安心しろ!服は既に飛行島に置いてきた!」

「…おいつ!?それじゃ肝試しの意味が…!」

「馬鹿野郎っ!!肝試しだぞ!肝試しは夏がシーズン…否!夏限定のイベントだぞ!!!」

「何だよその無茶苦茶!？」

「無茶苦茶も茶々くちやもないっ!…あつ…そういう最後にやりたいことがあつたんだよな…!」

「…ふん…どうせそれをやらねば何かをしても逃がさぬ気であろう?」

「…まあそうだけどね…それで!私から贈る夏を食らえー!!」

サマーソウルがそう叫びながらポイツと馬鹿でかいスイカを冒険家達へと投げつけた。

「わあ!大きいスイカだ!」

「キャンキャン!」

「美味しそうー!」

「えつと…スイカは塩をかけると美味しいって巻物に書いてますね…」

「でっけーな…!カブリーがいたらヤバかったな…!」

「でかい…あのドラゴンといい勝負だな…!」

各々様々な反応をそのスイカへとぶつけている冒険家達ではあるが、そのスイカ自体がプルプルと震えて立ち上がったのであった。

「ス…スイカって…生き物なんですか!?巻物…!巻物…!?!」

「なっ…何よ!?!スイカに足っ!?!って!?!エシリア行っちゃ駄目!?!」

「えっー!?面白そうなのにー?!」

「ふむ…近頃のスイカというものは足も生えるか…?」

スイカに足が生えたことに驚く冒険家は少なくとも無いが、そのスイカを面白がったり興味深く見るものや特に興味も持たない者がいたりした。

「ハハハッ!新鮮的でいいぞ!私からのプレゼントは喜んでいただけただけかな!」

「…うーん…私は前が見えないのでよくは分かりませんが…カスミ、どんな感じですか?」

フローリアが隣にいるカスミに問いかけたが、そのカスミは目をしかめて臨戦態勢になっていた。

「…ツ!」

「…?どうしたんですかカスミ?」

「みんな下がって!あのスイカに…まがごとが憑いてるわ!」

「何を言うか!私のスイカだぞ!このスイカはみんなで分けあって食べてもらおうと思っていたのにつ!」

サマーソウルは泣き叫びながらモアイ像から飛び降りてスイカを庇うようにカスミの前に立ち塞がった。

「どいて!まがごととは…!」

「やめろお！このスイカは……みんなで食べるんだ！私の作った塩で食べてもらいた
んだああ!!」

サマーソウルがそう叫ぶとスイカに手も生えはじめて、サマーソウルを掬い上げた。

「おおっ!?!私が丹精込めて育てたソウルスイカよ！私の思いに答えてくれたのか!?!」

「……!」

「ぐほあっ!?!」

だがソウルスイカは手の上のサマーソウルを弾き、サマーソウルは星となった。

「くっ……まがごとは祓い去るっ！祓いたまえっ!」

カスミは凜と両手を巨大ソウルスイカに向けて突きつけるとビームを発射した。

「ぶもー!」

だがそれを食らったソウルスイカはビームをキンキンと音を立てて弾き雄叫びをあげた。

「効いてない!?!」

「スイカッー!」

巨大スイカはピピョンと冒険家達へと飛びかかってきた。

「こうなったらヤケだ！くたばれ!」

「このヤロー!ぶっ飛びやがれ!」

「ボナペティでござる!」

冒険家達は飛びかかるスイカに向けて星たぬきを丸めたボールやら空っぽの財布や洋ナシとかウマルスやタコパスや錨などを投げつけたものの、全く効果は無いみたいであつた。

「ウォーターメロオオン!」

「あぶねえ!?!てかコイツ…鳴き声ぐらい統一しろつて…!」

「ンゴツ!」

「そうよ!てか何なのよアンタは!?!」

「…ワツ…ワレハ…スーパーソウルスイカ…デアル…キサマラ…ユルスマジ!」

「わあっ!喋つた!」

「喋る野菜ですか…あの人のお話にあつたことのようにですね。」

「呑気に言つてないで!逃げるわよフローリア!?!」

スイカはゴロゴロと転がりながら冒険家達へと迫り、彼らは脇目も振らずにごつごつ山を下山して雪崩れ込むように飛行島へと入りピレント島を後にした。なおその後巨大ソウルスイカはどこかの川だか湖でどんぶらこしていき、生活をしている。

—飛行島—

「はあ…ひどい目にあつたな…」

「そうか…俺達がいなかった夏の間にそんなことがあつたのか…」

「クライヴは…ダンテと一緒にバルラに帰省してたんだろ？」

「ああ、だが戻ったら何だか状況がリセットされていたようで…偽ダンテとか暴走兵士の軍団とかと戦つたな…まあ…余裕に殴り倒したが…」

「殴んのかよ…まあ俺様の得物は釘バットだから人の事は言えないわけだが…」

飛行島には帰省等の様々な理由で飛行島から離れていた冒険家が帰ってきていた。

「それにしても…どうしてラピュセルはRASNさんや小さい子にしか心を開かないんですしよ…分かりません…」

「…！」

「わあーい！」

「…！」

竜の国の王家の王女でドラグナーでもあるエクセリアはラピユセルとRASNとコヨミとタローが遊んでいるのを見ていた。

「…我慢できません!ラピユセルう〜!」

しかしエクセリアは我慢ならずでラピユセル達の方に向かった。

「ああん♪ラピユセル!よしよしよしよし!」

「…!」

「エクセリアねーね!コヨミもなでなでするのー!」

「キャンキャン!」

「…クルルル…!」

そして飛行島のとある林には惜しくも? ☆3以下の神気解放の上位に入れなかったヨシオが黄昏ていた。

「俺……ずっと飛行島いたのに……祭りに誘われず……コムギにも無視された……」

「こんなんじや……俺の存在は新しく入ったパイナップルに負けず劣らずになっちゃう……」

なお個人的に新しく入った☆3のクロスセイバーの二人で二人ともアレだ。でもカグラはリーダースキルがマラソン向きで、パインはレンファいるからいらぬ子状態で

……

「どうすりゃいいんだー!」

「なら夏れ!少年よ!」

「のわっ!?!化け物!?!」

ヨシオが叫ぶと飛行島の地面からサマーソウルが顔を生やした。

「化け物などではない!私は試練の調停者もとい暑き夏の天使……!サマーソウルなんだ

よお!」

「よくわかんないけど埋め直すか……」

ヨシオは聞く耳持たずといった感じで、サマーソウルの頭に手を置いて沈めはじめた。

「あーれ……じゃない!」

「うお!?!」

頭がすっぱりと隠れたときにサマーソウルはボバアツと土を撒き散らして、その肌を陽にさらした。

「…!?!」

ヨシオはその様子を見て絶句し、サマーソウルはヨシオの体をジロジロと見たり触ったりしていた。

「ふむ…なるほど…いいものは持つてるはずだがそれを出し切れて無い感がだだ漏れだな…」

「え!?!俺ってほんとにはやつぱすげえのか?!」

「…フツ…実際誰もがダイヤの原石で磨きをあげれば誰もが輝けるんだぜ?」

「でもスキルも微妙で…ステータス的にも到底…」

「馬鹿野郎っ!!」

「ふべっ!?!」

ヨシオはサマーソウルのリアットで吹き飛ばされた。

「痛い…」

「はじめから弱気になるな!そんなんでは夏の男にはなれない!なれるとしたら冬か秋の男だあ!」

「いや、夏よか冬のほうが…」

「馬鹿野郎お！」

今度はソバットでヨシオは吹き飛んだ。

「うぐ…」

「そんなんでは強くはなれない…夏にはなれない！ならば…その底根を叩き直してやる
！」

「まっ…待って！俺の合意は…」

「是非もなしだ！夏るぞ！少年よ！」

「わっー!？」

…そして暫くサマーソウルとヨシオの姿は誰も見なくなつたとか…